

ワークとライフのバランス - 労働時間とはなんだろう

09.6.11

岡山県労働者学習協会 長久啓太

ブログ「勉客商売」 <http://benkaku.typepad.jp/blog/>

一。前回のおさらい

資本が運動する目的は、より大きい貨幣（価値）の獲得にある

これが目的
にならざる
をえない！



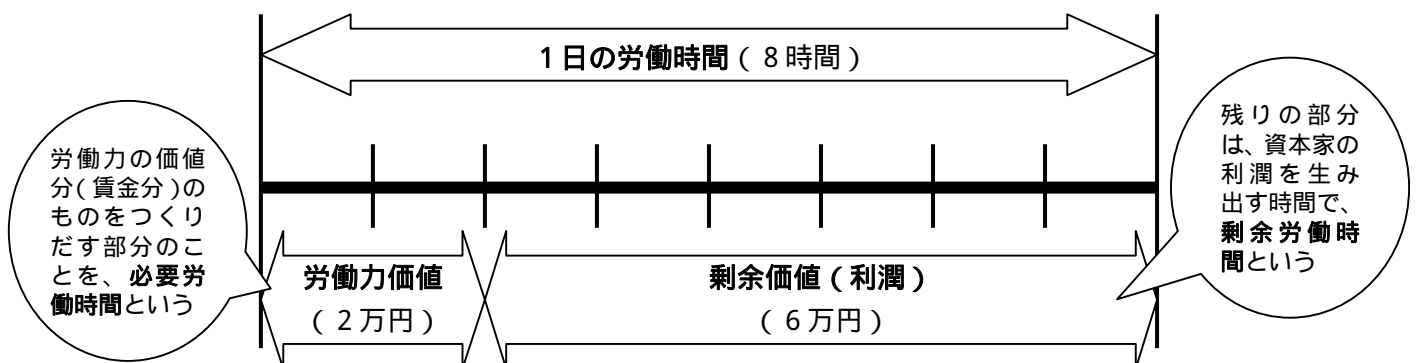
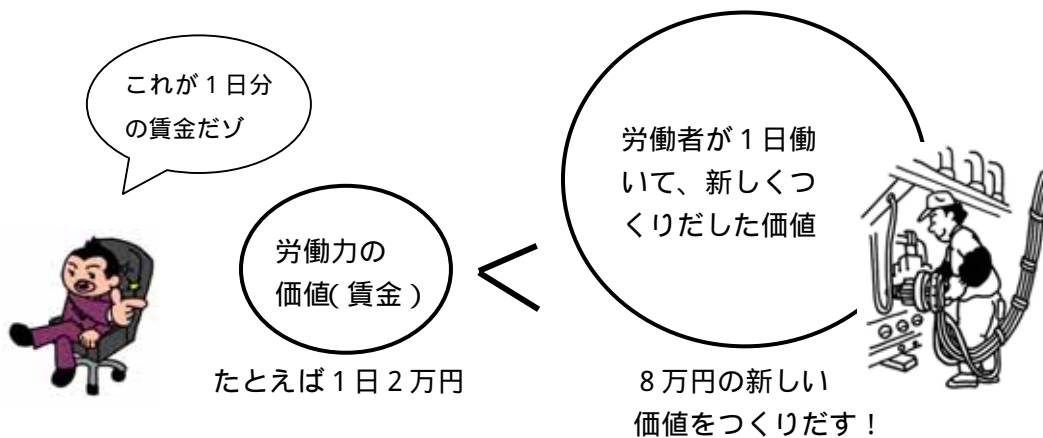
搾取とは

* 自ら労働して価値を生み出さないものが、他人の労働の成果の一定部分をうばい
ること。資本主義以前にも搾取はあったが、資本主義の搾取は目に見えない。

労働者は、「労働力」を時間決めて資本家に売っている

* 労働力の再生産費が「賃金」(つまり働くエネルギーを再生産するための生活費)

* 「労働力」という商品は、資本主義的生産が、高い水準の生産力をもっているため、
「自分の生活を維持していく分(労働力の再生産費)」よりも多くの価値を、契約し
た時間内の労働で生み出すことができる、特別の性質をもっている。



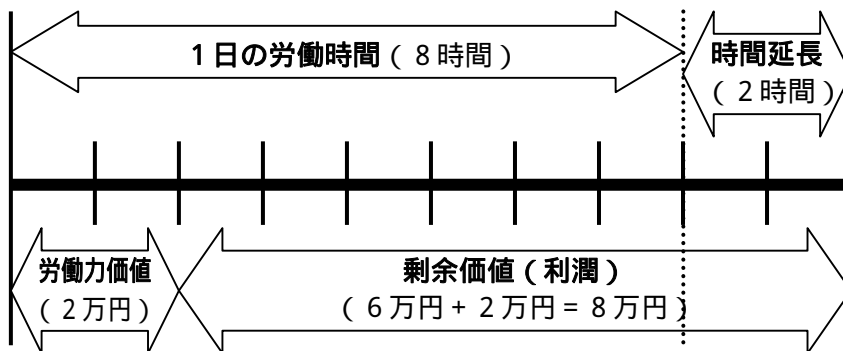
商品の“命がけの飛躍”

- * 商品が実際に売れるかどうかは、市場に出てみないとわからない。実際に需要があるかわからないし、競争相手もいる。競争に敗れば、倒産・廃業がまっている。
- * より大きな資本をもとでにし、より高い生産力・生産技術・販売方法を生みだし競争力を強化して、商品売り続けることを資本家は強制されます。
- * 資本家は、資本家どうしの競争という“鉄の法則”に強制されて、できるだけ大きな剰余価値の獲得＝労働者への搾取強化をすすめるをえません。

二。搾取を強める方法（先週に引き続き、生産労働の職場をイメージしてください）

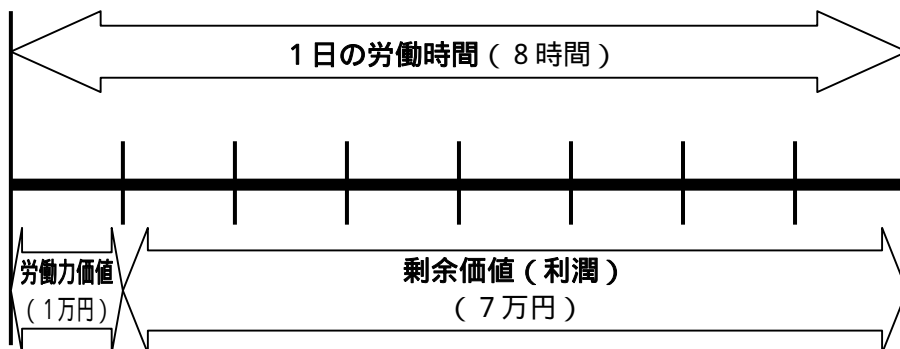
資本家は、たえずかれらどうしのあいだの激しい競争戦にさらされています。かれらはこの競争戦にうちかっていかななくてはならないという事情に**強制されて**、できるだけ多くの剰余価値を手に入れようと、労働者にたいする**搾取強化**をすすめます。資本家による搾取強化には以下の3つの基本的な方法があります（数字は単純化）。

1. 労働時間の延長（絶対的剰余価値の生産） 今日のお話です。



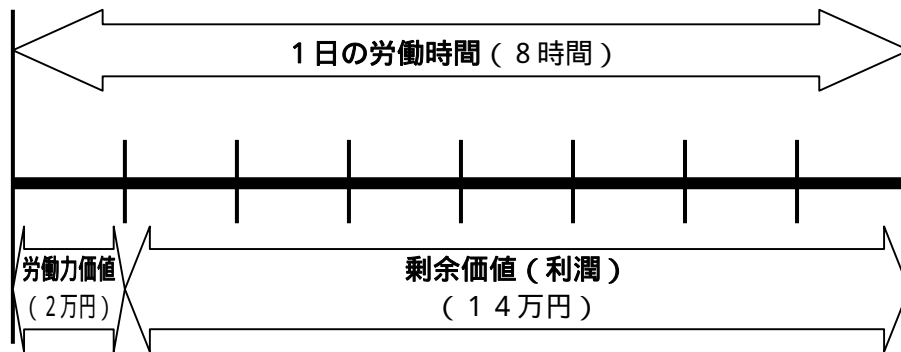
- * 「残業でかせいだ」つもりが、逆に資本家にかせがれています。

2. 労働生産性の向上（相対的剰余価値の生産）



- * 生産力の向上による必要労働時間の短縮（労働力価値の縮小）

3. 労働強度の増大（相対的剰余価値の生産）



* 同じ時間で、より大きな価値を生み出させる（労働密度の強化）

三。労働時間とは何か、どうやって決まるのか

1. 労働時間の最低限度と最高限度

労働時間の最低限度は？

* 必要労働時間分は、働かなければならない（社会が維持できない）

労働時間の最高限度は？

* 最高限度を規制する二重の規定

労働力の肉体的制限

「1日のある部分のあいだにこの<生命>力は休息し、睡眠をとらなければならない、また他の部分のあいだに人間は食事をし、身体を洗い、衣服を着るなどの他の肉体的な諸欲求を満たさなければならない」（『資本論』第8章、394P）

社会的慣習の諸制限

「労働者は、知的および社会的な諸欲求の充足のために時間を必要とするのであり、それら諸欲求の範囲と数は、一般的な文化水準によって規定されている」（前掲、394P）

* 弾力性に富む「制限」

「それゆえ、労働日の変化は、肉体的および社会的な諸制限の内部で行なわれる。しかし、この二つの制限はきわめて弾力性に富むものであって、変動の余地はきわめて大きい。こうして、8、10、12、14、16、18時間からなる労働日、したがってきわめて相異なる長さの労働日が存在するのである」（前掲、394P）

2. 権利 v s 権利

資本家の「権利」

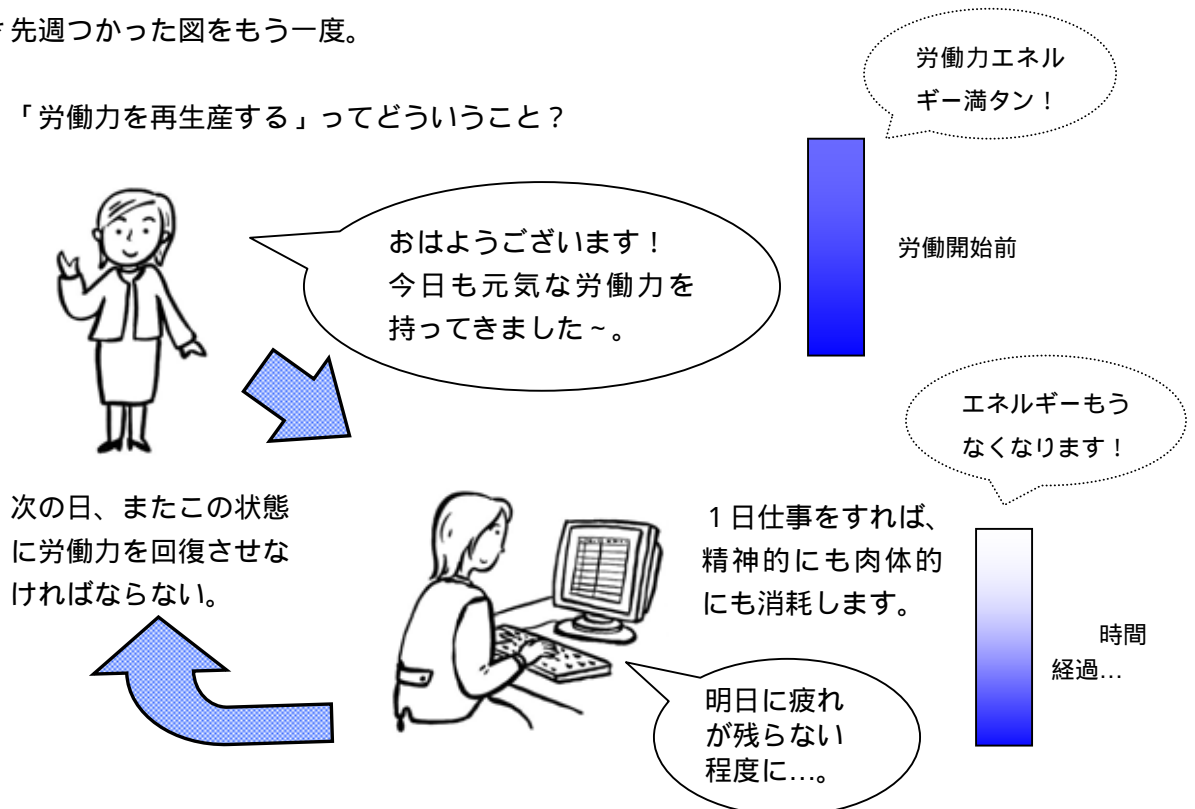
「資本家は、労働力をその日価値で買った。一労働日のあいだ中、労働力の使用価値は彼のものである。したがって、**彼は労働者を1日のあいだ自分のために労働させる権利を手に入れた**。しかし、一労働日とはなにか？ いずれにせよ、自然の一生活日よりは短い。どれだけ短いのか？ 資本家は、この“**極限**”すなわち労働日のやむをえない制限については彼独自の見解をもっている」
(前掲、395P)

労働者の「権利」

「私の日々の労働力の使用はあなたのものである。しかし、私の労働力の日々の販売価格を媒介にして、**私は日々この労働力を再生産し、それゆえ新たに売ることができなければならない**。年齢などによる自然的な消耗を別にすれば、私は、あすもきょうと同じ正常な状態にある力と健康とはつつさで労働できなければならない。(略)私は分別のある倹約な一家のあるじのように、**私の唯一の財産である労働力を管理し、そのばかげた浪費はいっさい節約することにしよう**。私は毎日、労働力の正常な持続と健全な発達とに合致する限りでのみ労働力を流動させ、運動に、すなわち労働に転換しよう」
(前掲、397P)

*先週つかった図をもう一度。

「労働力を再生産する」ってどういうこと？



「あすもきょうと同じ正常な状態にある力と健康と
はつつさで労働できなければならない」！

強力がことを決する

「ここでは、どちらも等しく商品交換の法則によって確認された権利対権利という一つの二律背反が生じる。同等な権利と権利とのあいだでは**強力がことを決する**。こうして、資本主義的生産の歴史においては、労働日の標準化は、労働日の諸制限をめぐる闘争...総資本家すなわち資本家階級と、総労働者すなわち労働者階級とのあいだの一闘争...としてあらわれる」 (前掲、399P)

まとめ。

**労働時間は、資本家階級と労働者階級の
たたかひの力関係によって決まる！**



四。資本を社会的に規制せよ！

- 1。資本は、生きた労働を吸収することによって吸血鬼のように活気づく(マルクス)
労働時間の「ひったくり」「こそどろ」「ちょろまかし」(資料 ~)

昼夜労働と夜勤労働—交替制

「1日の24時間全部にわたって労働をわがものとするのが、資本主義的生産の内在的衝動なのである。しかし、同じ労働力が昼夜連続的にしぼり取られるなどということは、肉体的に不可能であるから、この肉体的障害を克服するために、昼夜食い尽くされる労働力と夜間に食い尽くされる労働力との交替が必要になる」 (前掲、440P)

現代日本ではどうか

- * 先進国でもまれにみる長時間労働。あいまいな労働時間の「くぎり」。
- * 有休休暇は取得率50%をきる。バカンスって、なんの話？
- * サービス残業...吸血鬼がもっとも活気づく時間！

- 2。労働者は、働きすぎるとどうなるか

「不幸をもたらす」

- * 家庭のおよび私生活への不法な侵害
- * 健康をむしばみ、早い老化と早死においこむ(資料)
- * 道徳的退廃(資料)



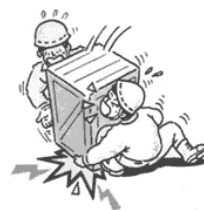
「感覚麻痺が彼らを襲う」

「ロンドンのある大陪審の前に3人の鉄道労働者、すなわち車掌、機関士、および信号手が同時に立っている。ある大きな鉄道事故が数百人の乗客をあの世に送ったのである。鉄道労働者たちの怠慢が事故の原因である。彼らは異口同音にこう言明している。10年ないし12年前には、自分たちの労働は1日にたった8時間にすぎなかった。最近の5、6年のあいだに、労働は14、18、20時間へしゃにむに引き上げられ、また行楽専用列車の時期のように旅行好きな人人がとくに激しく殺到する場合には、労働は、しばしば中断なしに4050時間続く。彼らは普通の人間であって、キュクロープスたちギリシア神話に登場する巨人族ではない。ある時点では、彼らの労働力は役に立たなくなる。感覚麻痺が彼らを襲う。彼らの脳は考えることをやめ、彼らの目は見ることをやめる、と」
(前掲、432P)

*また、その後の文章の(注)で、マルクスは別の鉄道労働者の声を紹介している。

「週刊紙は、毎週のように『おそろべき宿命的な事故』『凄惨な悲劇』などという『センセーショナルな見出し』をつけて、たくさんの新しい鉄道事故を掲載している。これにたいし、北スタッフォード線の一労働者は次のように答えている『機関士と火夫の注意力が一瞬でもゆるめば、その結果がどうなるかはだれもが知っている。それにしても、ひどい荒天のなかで、中休みも休養もなしに際限なく労働が延長される場合、どうしてそれ以外のことが起こりえましようか?』」
(前掲、433~434P)

*これは、現代日本のさまざまな「事故」「労働災害」にも言えるのではないか。



3. 資本を社会的に規制せよ!

「資本は、剰余労働を求めるその無制限な盲目的衝動、その人狼の渴望のなかで、労働日の精神的な最大限度のみではなく、その純粋に肉体的な最大限度をも突破していく。資本は、身体の成長、発達、および健康維持のための時間を強奪する。それは、外気と日光にあたるために必要な時間を略奪する。それは食事時間をけずり取り、できれば食事時間を生産過程そのものに合体させようとし、その結果、ボイラーに石炭が、機械設備に油脂があてがわれるのと同じように、食物が単なる生産手段としての労働者にあてがわれる。それは、生命力の蓄積、更新、活気回復のための熟睡を、まったく消耗し切った有機体の蘇生のためになくしてはならない程度の無感覚状態の時間に切りつめる。この場合、労働力の正常な維持が労働日の限度を規定するのではなく、逆に労働力の最大可能な日々の支出がたとえそれがいかに病的で強制的で苦痛であろうと労働者の休息時間の限度を規定する。**資本は労働力の寿命を問題にしない。**それが関心をもつのは、ただ一つ、一労働日中に流動化させられうる労働力の最大限のみである」
(前掲、455~456P)

わかっちゃいるけどやめられない！（次週、より詳しくやります）

「“大洪水よ、わが亡きあとに来たれ！”これがすべての資本家およびすべての資本家国民のスローガンである。それゆえ、資本は、社会によって強制されるのでなければ、労働者の健康と寿命に対し、なんらの顧慮も払わない。・・・自由競争は、資本主義的生産の内在的な諸法則を、個々の資本家にたいして外的な強制法則として通させるのである」（前掲、464P）

これを、長久風にかみ砕くと、次のようになります。

「“わかっちゃいるけどやめられない！”これがすべての資本家およびすべての資本家たちのスローガンである。それゆえ、資本は、社会的な規制（法律など）をつくって彼らを縛るようにしなければ、労働者の健康と寿命に対し、なんらの気づかいも払わない。・・・資本主義社会は、『生産のための生産』『資本家どうしの命がけの競争』という諸法則を、個々の資本家にたいして逃れられない強制的な法則として貫徹させるのである」

* 傍線部分を「失業問題」「非正規労働者や派遣労働者」「貧困に苦しむ人びと」「地球環境問題」「乗客の安全」「住居の安全」「食の安全」「国民の健康で文化的な生活」など、読みかえてみてください。

* 「でもここは、お金がうんともうかるところですよ！」（資料の最後）

* マルクスは、資本論の「注」でこんな話も紹介している。

「住民の健康は国民的資本のきわめて重要な要素であるにもかかわらず、遺憾ながらわれわれは、資本家たちがこの宝を保存し大切に**する用意がまったくない**ことを認めざるをえない。・・・労働者の健康への顧慮が工場主たちに強制された」（『タイムズ』1861年11月5日）

「『他の資本家たちとの競争』は、自分たちが児童の労働時間を『自発的に』制限することなど許さない。それゆえ、いくらわれわれが上記の弊害を嘆いたところで、工場主たちのあいだでなんらかの種類の協定によってそれを阻止することは不可能であろう。・・・これらすべての点を考慮した結果、われわれは強制法が必要であると確信するにいたった」（『児童労働委員会 第1次報告書』1863年）



産業革命期イギリスの炭坑で働く少年労働者（18世紀）

標準労働日（労働時間の国家的規制）の確立は

- * 「資本家と労働者とのあいだの数世紀にわたる闘争の成果である」（前掲、466P）
- * 『資本論』には、イギリスの労働者が、労働時間を制限するために、数世紀にわたって闘いを続けた歴史が、生々しく記述されている。
- * 労働時間を10時間に制限する工場法獲得の結果、イギリス資本主義は驚くべき発展をみせた！（生産性があがった）

マルクスの指摘－自由な時間の確保は、仕事にも反作用する

「労働時間の節約は、自由な時間の増大、つまり**個人の完全な発展のための時間の増大**に等しく、またこの発展それ自身がこれまた最大の生産力として、労働の生産力に反作用を及ぼす。・・・余暇時間でもあれば、高度な活動のための時間でもある、自由な時間は、もちろんその持ち手を、これまでとは違った主体に転化してしまうのであって、それからは彼は直接的生産過程にも、このような**新たな主体**としてはいっていくのである」（マルクス『資本論草稿集2』）

自分自身の時間の主人になることによって…（資料）

「われわれは、労働日の制限こそ、それなしには改善と解放のための他のいっさいの企てがむだに終わるような予備条件であると考え。それは労働者階級、すなわちあらゆる国民の基幹をなす多数者の体力と健康とを回復させるために必要である。それは、知識的発達や社会的交際や社会的政治的活動の可能性を労働者に返還させるためにも、それにおとらず必要である。われわれは、労働日の法定限度として8労働時間を提案する」

（1866年9月、ジュネーブの国際労働者大会の決議）

社会的バリケードを

「自分たちを悩ます蛇にたいする『防衛』のために、**労働者たちは結集し、階級として一つの国法を、…強力な社会的防止手段を、奪取しなければならない**」

（前掲、525P）

- * 資本への「社会的規制」は、今後の社会発展を考えるうでの重要なキーワードに！

労働時間についてより学びたい人は

『労働基準法を考える』（不破哲三、新日本新書、1993年）

『人間らしい労働と時間短縮』（西村直樹、新日本出版社、1996年）

『「仕事が終わらない」 - 告発・過労死』（しんぶん赤旗国民運動部、新日本出版社、2003年）

『働き方を見直しませんか』（西村直樹、学習の友社、2004年）

次回（6 / 18）は「わかっちゃいるけどやめられない－資本主義の矛盾とは」

労働時間 資料編

(資料 ~ は、『資本論』第8章「労働日」に出てくる引用です)

資料 『工場監督官報告書。1858年4月30日...』

「私は相変わらず同じ数の苦情、すなわち労働者に法律的に保証された食事時間および休養時間を侵害することによって、労働者から毎日半時間または3 / 4時間がひた取られているという苦情を受け取っている」

資料 『工場監督官報告書。1860年10月31日...』

「われわれが食事時間中または他に違法な時間に労働者たちが仕事しているのを現場で押さえると、労働者たちがどうしても〔定時に〕工場を立ち去ろうとしないとか、また彼らの労働(機械の掃除など)をやめさせるためには、とくに土曜日の午後には、強制が必要であるといったことが、しばし口実とされる。しかし『工員たち』が、機械の停止後も工場に残っているとすれば、それはただ、朝の6時から晩の6時までの間に、すなわち法定労働時間中に、そのような仕事をするための時間が彼らには許されていないからにほかならない」

資料 『工場監督官報告書。1856年10月31日...』

「法廷労働時間を超えた過度労働で得られる特別利潤は、多くの工場主たちにとってあまりにも大きい誘惑であり、これに抵抗できないように思われる。彼らは運よく発見されないことをあてにしており、発見された場合でさえも、罰金と裁判費用とが取るに足らない額なので、相変わらず自分たちには差引利益が保証されると計算している」
「1日中、“こそどろの積み重ね”によって追加時間が得られる場合には、監督官たちにとって、それを立証するのはほとんど乗り越えられない難事である」

資本がこのように労働者たちの食事時間や休養時間から「こそどろ」することを、工場監督官たちも、「数分間のちょろまかし」「数分間のひたくり」または労働者たちが呼んでいるように「食事時間のかじり取り」と言っている。

資料 『1861年度のアイルランドの製パン業にかんする調査委員会の報告書』

「本委員会は、12時間を超える労働日の延長が労働者の家庭的および私的生活の不法な侵害であり、各人の家庭生活を妨害し、彼が、息子、兄弟、夫、および父として家庭義務を履行するのを妨害することによって、有害な道徳的結果をもたらすものと信じる。
12時間を超える労働は、労働者の健康をむしろむ傾向があり、早い老化と早死とをもたらす、それゆえ、労働者家族の不幸をもたらすのである。これら家族は、家長による世話と扶養とを、もっとも必要としているときに奪われるからである」

資料 『工場監督官報告書。1848年10月31日』

たいていの「超過時間労働者」は次のように供述しているー

「彼らは、もっと少ない労賃で10時間働くほうが好ましいのであるが、彼らにはまったく**選択権がない**。彼らのうちの多くの者が失業しており、多くの紡績工が余儀なくただの“糸つなぎ工”として働かされているのであるから、もし彼らがより長い労働時間を拒絶すれば、すぐさま他の者が彼らに取って代わるであろう。こうして、彼らにとって問題になることは、**より長時間働くか、それとも首を切られるかということである**」

資料 『工場監督官報告書。1859年10月31日』

10時間法案は、それが適用された産業部門において、「労働者たちを完全な退化から救い、彼らの肉体的状態を保護した」。

「労働者自身に属する時間と彼の事業主に属する時間がついにはっきり区別されたことは、さらにいっそう大きな利益である。いまや労働者は、彼が販売する時間がいつ始まるかを知っている。そして、彼はこのことをまえもって正確にしているのであるから、**自分自身の時間を自分自身のために予定することができる**。・・・それら（工場法）は、彼ら〔労働者たち〕を**自分自身の時間の主人にすることによって、彼らがいっかは政治権力を掌握するにいたることを可能にする精神的エネルギーを彼らに与えた**」

資料 F・ナイチンゲール『看護覚え書』（1860年）

「このような場所で、しかも無理な姿勢、運動不足、短い食事時間と栄養不足、長時間にわたる過酷な労働、不潔な空気といった状況下であって、彼らの大多数が胸部疾患、それもたいていは肺結核で若死するという事実は、これはいったい不思議といえるであろうか？ それに加えて、これらの作業場には暴飲という悪い習慣が共通して見られる。人びとは酒の力を借りなければ仕事をやりおおせず、それが彼らの健康のレベルを下げ、身持ちを崩させ、刻々と、早過ぎる墓場行きへと駆り立てる。**雇用者がこれらを考慮することは稀である**。労働者たちととり交わした雇用契約書には、健康的な作業室などという条項はどこにもない。雇用者は賃金を支払うことが雇用契約上の自分たち側の責務のすべてであると考えている。そしてこの**賃金と引き換えに、男女の労働者たちは労働と健康と、そして生命を提供しなければならないのである**」

（第1章「喚起と保温」29P）

資料 エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』(1844年)

「彼らは野獣のように駆りたてられ、休息も、安らかな人生の享樂もゆるされない。彼らは性的享樂と飲酒以外のすべての享樂を奪われ、その代わりに、**あらゆる精神力と体力をつかいはたすまで、毎日働かされる**。そしてそのはてに彼らは、自分の思いどおりになるたった二つの享樂に、まるで気が狂ったようにいつまでもおぼれる。そしてこれらすべてに耐えても、どうにもならないときには、彼らは恐慌の犠牲となって失業し、それまでまだゆるされていたわずかなものさえ、奪われるのである」

「労働者は疲れて、ふらふらになって仕事から帰ってくる。その住居はまったく住み心地が悪く、しめっぽくて、不快で、不潔である。彼はどうしても気晴らしがしたくなる。

彼には、労働がやりがいのあるものとなり、つらい明日への思いに耐えられるようにしてくれるなにかが、どうしても必要なのである」

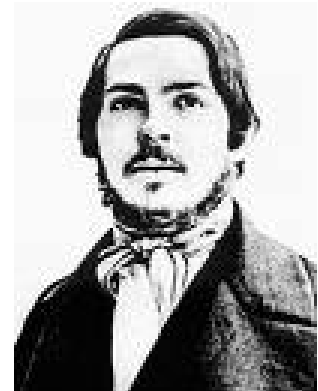


1870年代のロンドン 労働者階級の居住地

「仲間がほしいという彼の気持ちを見たしてくれるのは、ただ酒場だけである。友達と会うことができる場所は、ほかにはない - そういう状態のなかで、労働者は酒を飲みたいという気持ちをつよくもってはいけないうのだろうか、酒の誘惑にうちかたなければならぬのだろうか？ むしろ逆に、こういう状態のもとでは大多数の労働者が酒飲みにならざるをえない精神的肉体的な必然性があるのである」

「労働は彼に精神的な活動の場を与えないのに、その労働をきちんとやっていくためには、ほかのことをまったく考えてはられないほどの注意力が必要とされる。そしてこのような労働 - **労働者の自由時間をすべて奪い、食うひまも寝るひまも与えず、戸外で運動したり、自然を楽しんだり、まして精神的な活動の時間などはゆるさないような労働** - を刑罰として科することは、人間を動物に転落させてしまうことではないだろうか！ 労働者にはやはり、自分の運命にしたがって『よい労働者』となり、ブルジョアジーの利益を『忠実に』守るか - その場合、彼は確実に動物に転落する - 、あるいは、できるだけ、抵抗して自分の人間性を守るためにたたかうか、二つに一つの選択しか残されていない。そしてあとの道は、ブルジョアジーとのたたかひのなかでのみ可能である」

「私はイギリスのブルジョアジーほどひどく退廃し、私利私欲のために救いがたいまでに腐敗し、内面的にはむしばまれ、あらゆる進歩の能力を失った階級に出会ったことがない。(略)彼らにとっては、この世に存在するものは、彼ら自身もふくめて、ただお金のためにあるものだけである。というのは、彼らはただもう金もうけのためにだけ生きていて、手早くもうけること以外にはなんの喜びも知らず、お金を失う以外にはなんの苦しみも知らないからである。(略)たしかに、これらのイギリスのブルジョアはよい夫であり、家族のよい一員であり、そのほかにもいろいろな個人的美德をもち、日常の交際では、ほかの国のすべてのブルジョアと同じように、上品で礼儀正しいし、商売においてもドイツ人よりも交渉しやすい。(略)しかしこういうことがすべてなんの役に立つだろうか？ 結局のところ、自分の利益と、とくに金もうけが、唯一の決定的な動機なのである。私はあるとき、こういうブルジョアの1人とマンチェスターの町へ行ったことがある。そして労働者街のみじめな不健康な家の建て方や、そのぞっとするような状態について彼と話をし、こんなひどいつくり方の町はみたことがないと、断言した。その男は黙って全部聞いていたが、町角で私と別れるときに、こういった、**でもここはお金がうんともうかる場所ですよ** (and yet , there is a great deal of money made here)、**さようなら！** イギリスのブルジョアにとっては、お金さえもうかるのなら、労働者が飢えようと飢えまいと、まったくどうでもよいことなのである。すべての生活関係は金もうけという物差しではかられ、金にならないことはくだらないことであり、非現実的で観念的である」



若きエンゲルス